

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

とある最強の一能力喰い（スキルイーター）

【作者名】

零崎一識

【あらすじ】

東京の三分の二の大きさを誇る、人工三百二十万人がいる科学の町、学園都市。

そんな所にいる元スキルアウト少年、波櫻恭哉（はざくら きょうや）は上条当麻と出会い、人生が変わっていく。

科学と魔術と波櫻恭哉が交差するとき物語は始まる。

て気絶してしまった。

「お、おい恭哉大丈夫か！」

「あははは、目の前に猫耳メイドが……今なら死んでもいいかも」
「恭哉ああああああ!!!」

この小説の主人公、波櫻恭哉はどこか遠くの桃源郷に逝ってしまった様だ。当麻はまあ一恭哉を心臓マスタージをしたり体を揺さぶったりしたが無駄だった。まあこいつだし大丈夫かな〜と思い再び寝かせておいた。

当麻はふと、周りを見ると……

「君い、俺たちとお茶しない？」

「いっぱいかわいがってあげるよ、グへへへへ」

どんな難破の仕方だよと当麻は思う。グへへへへとか言ってる時点でアウトだろ、しかも向ここの相手は怯えるどころか、むしろ堂々としている。

第一級フラグ建設者、上条当麻はこの少女がとんでもない奴と知るわけもなく助けようと思ってしまったのだ。

「おい、当麻」

「うおおお!?生きてたのか」

「勝手に殺すな、それより当麻あの子助けに行くんだろ」

「ああー!」

「ほんつと、お人よしだな。」

「しゃーない、俺も手伝ってやるよ」

「ほんとかー!」

「当麻があんな連中に負ける訳ないけど一応、保険だ」

「ありがとうな、恭哉！」

当麻はそう言って微笑む、こんな笑顔を女子に見せたら一発で堕ちるだろう。

だが、恭哉はあえて……

「なんだよ、気色悪いいな」

罵倒しておいた。

「ひどい!？」

「まあいい、さっさと行くぞ」

「スルーかよ……」

恭哉は当麻を置いていき、スタスタと不良の前に立ち。

「おい、テメエら子供相手にナンパしてんじゃねえぞ。」

「目障りなんだよ」

「テメエ、調子乗ってんじゃねえぞ!!」

「なんだとー俺らはロリコンじゃねえ」

恭哉は不良を挑発するとあら不思議、キュウピーちゃんも驚きの三秒でできる不良の積み合わせができちゃった、もちろんだれも食べないが。

「つーか、自分たちでロリコンじゃねえ!とか言ってるじゃん。」

かー最高だな、ロリコンっていうのはガキ相手にナンパするような奴を言うんだよ。

てか俺の目の前にいるじゃん」

「はあああ・・・」

当麻はため息をつく、まあ仕方がないだろう。波櫻恭哉は超が付くほどの毒舌で尚且つドSなのだ。

友達や知り合いにはあまり言わないのだが嫌いな奴のときは、とことん言う奴なので当麻はそのやり取りで喧嘩などに巻き込まれ一度、スキルアウトのチームを三つほど潰したことがある。

(普通にしていりゃ、良い奴なんだけどな)

「つつか、ガキ相手に・・・」

「な、なんだと、言わせておけば・・・」

両者一向譲らずまだ口論をしている、不良の方はもう半泣き状態なのだが。

当麻はそろそろ不良の方が可哀想になり恭哉に声をかける。

だが、恭哉はここで気づけば、いや気づくべきだった。少女の顔が下を向き体をプルプル震えていたところを。

「なあ恭哉もうその辺で・・・」子供やらガキやら私はそんな幼児体型かああああ
!!!!!!
「

少女は子供扱いされたのが嫌だったのか突如、体から電気を発生させ不良たちを丸こげにしまった。

「うぎゃあああああああ
!!!???

「あびびびびびびび
「

「うおっとーあぶなー」

恭哉はかるつじて受け止めた、いや受け止めたと言つよりも吸収し

たと言ったほうが正しいのだろう。

電撃を放った少女は信じられないと言う顔をしている。なにしろLEVEL3以上の電撃を止められたのだから。

当麻のほうはお馴染みの幻想殺し（イマジンプレイカー）で打ち消している。

幻想殺しというのは異能の力なら火や電撃はもちろん神の奇跡まで打ち消せれる代物なのだが効力は右手だけなのでほかの部分に当たったら普通の人と同じダメージを受けてしまうので内心ビビリまくりなのだ。

少女は呆然としていた、手加減はしたもののそこそこの威力はあったはず。それをいとも簡単に止められてしまった。

少女は止められて悔しいと言う気持ちよりも戦ってみたいという気持ちのほうが強かった、戦ってみたい、この男たちはどのくらい強いだろう、そんな思考がグルグルと回りそして……………。

「ねえ、その二人、名前は？」

「あん？」

「だから名前よ、名前」

「ああ、俺は波櫻恭哉、こっちのつんつん頭は上条当麻だ」

少女はふーんと頷き、二人の顔を見て……………。

「私は御坂美琴、アンタら私と勝負しなさい!!」

「……………はあ!!??」

どこの果たし状だよと心の中でツッコむ。しかも御坂美琴って言ったら学園都市に七人しかいないLEVEL5ではないか。

なにが私と勝負しなさい!!だ、戦ったらさっきの不良みたいに黒こ

げになってしまつてはないか。

(は!?ふざけんなよ、俺の人生短すぎだろ！)

超電磁砲(レールガン)なんて打たれてみる、腹に風穴開くぞ！)

「なにゴチャゴチャ考えてんのよ、返事は？」

「そんなの決まってるんだろ」

恭哉は一つ溜めて。

「い・や・だ!!」

「どうしてよー!」

そこで当麻が説明する。

「だって、考えてみるよ。」

俺と恭哉はLEVEL0なのに勝てるわけないじゃないか」

この学園都市は能力者がいる、低能力者、異能力者、強能力者、大能力者、超能力者、そして無能力者がいる。

その中で当麻と恭哉は無能力者だ、当麻の場合、能力測定をやってもすべて測定不能になりLEVEL0。

恭哉はLEVEL4以上の力はあるのだがめんどくさいからやっ
ていないのでLEVEL0なのだ。

「じゃあ、私の電撃をどうやって止めたのよー!」

「それは………禁則事項です」

某未来人の真似を試してみたのだがみさかの反応は？

「そうか、そうか。」

あくまでしらを切るつもりなのね………なら!!
「力づくではかせてもらつたわ!!!」

「はあああああああ
!!!??」

「待ちなさい!!」

「ちくしょう、最近ろくなもんじゃねえ！当麻、お前のせいだからな」

「今回はほとんど恭哉のせいだろ!？」

「なに、ペちゃくちや喋ってんのよ。早くつかまわって行ってんだろ
うが!!」

「あああ、もう不幸だあああああ!!!」

御坂美琴もといビリビリと波櫻恭哉、上条当麻のリアル鬼ごっこが
始まる!!

ビリビリ鬼ごっこ

私のこと波櫻恭哉は隣にいる不幸の塊、上条当麻と一緒に後ろにいるビリビリ中学生、御坂美琴となんとも楽しくない真夜中の鬼ごっこの真っ最中だった。

「ふ、不幸だぁー!!」

「おい、当麻のせいで不幸が降ってきたじゃねえか!」

「なんだよ不幸が降るって、元は恭哉のせいだろ!」

「ごちゃごちゃ言ってるんで止まらせて言ってるんでしょが!!!」

もつどのくらい走っただろうか、ざっと三十分くらいずっと走り続けているのではないだろうか。恭哉は元スキルアウトなので腕っ節やスタミナは自信があったのだが後ろからずっとペースを落とさず、ビリビリさせながら走ってくる女子中学生を見たら少しショックを受けていた。

恭哉はそんなことを考えながら走っていたら、ふと止まってしまった。

「はぁ、やっと止まってくれたわね」

「……別にお前のために止まったわけじゃないけどな」

「うっさい。アンタは私に倒されればいいのよ」

「いきなり、死刑宣告!」

「っーか、あんたの隣にいたツンツン頭は?」

恭哉はあれっ!と後ろに振り向くが誰もいず静まり返ってた。まあ当麻のことだ、どこかで空き缶踏んでいるに違いないと思っていたら突如、恭哉の頭の横に電撃が通りさっていた。

「あぶなっ!!!」

「ちっ、外したか……」

「女子中学生が舌打ちするもんじゃないですよ!」

「だーから、ごちゃごちゃ言ってるんじゃないわよ!」

御坂は足を地面にドンツと踏みつけ電気を発生させ恭哉に向け、当てようとするが恭哉は左手を突き出すと空間がひしゃげた様な音がすると跡形もなく電撃が消えてなくなった。

「あーも、なんでアンタには当たらないのよー！」

「さあ、実力じゃね？」

この時、御坂の頭のどこかでブチツとなったような気がする。すると御坂はスカートのポケットからコインを一枚取り出し、右手を構えた。

「ヤバッ、あれ超電磁砲じゃんー！」

「死になさい」

御坂はコインを上弾き、落ちてきて親指で撃つと同時にオレンジ色の火花を纏ったコインが恭哉に向かっていく。

恭哉は咄嗟に顔を庇うように左手を出す。次の瞬間さつきと同じような音がし、威力が吸収されたように地面にコインがチャリンと鳴り、コインが落ちる。

「えっ……」

御坂は驚きの表情を浮かべる。電撃は止められたものまさか超電磁砲まで止めるれるとは思いつきもなかった。

「ど、どっして私の超電磁砲を止められたのよー！」

「簡単だ、ただお前の超電磁砲の威力を喰らっただけだ」

「はあ?」

御坂は何言ってんだこの男はという顔をしている。まあ、初めて当麻にこの説明をしたらチンプンカンプン顔をしてたからなと思いついてみた。

「ちなみにもっとすごいことをしてやるっ」

恭哉は財布からコインを二枚取り出しそして両手を突き出し構えた。

「まさか……」

「そう、そのまさかだ!!」

恭哉は御坂と同じようにコインを上弾く。

「一一連式 超電磁砲(ダブルレールガン)!!!」

弾いたコインはまっすぐ上に上がり、落ちてきたコインを先ほど御坂がやったようにそのまま御坂のほうに向けて弾く。

「えっ……きゃあああ!!」

もちろん恭哉は紳士（自称）なので御坂には当たらず、顔の横を通りすぎていく。

「アホ、女にぶちかます奴がいるか」

「な、なによこれで勝った気にならないでよね覚えてなさい!」

御坂はどこかの下っ端の捨て台詞を吐いて去っていった。

「別に勝負したつもりはないんだけどな」

恭哉もその場を去ろうとすると大事なことを忘れていた。

「そう言えば当麻は……」

「ふう、「こ」までくれば追ってこないってあれ、恭哉は？」

「おーい、恭哉?」

当麻すまん、今度なんかおごると思う恭哉だった。

無論、覚えてたらの話だが。

とある日常

「……………にいちちゃん…」

「ん……………」

「お兄ちゃん起きてください、お兄ちゃん！」

「ああ、最愛か、おはよう」

絹旗最愛。

柵川中学一年、俺の自慢の妹だ。なぜ苗字が違うって？それは義理の妹だからだ、その理由については禁則事項。

「お兄ちゃんさっき、小萌先生に超遅れるって電話しましたよ」

「えっ、今何時!?!」

最愛は俺の枕元にある目覚まし時計を指差す。その時間はとある高校登校時刻を二十分オーバーしているではないか。

俺はスキルアウト時代、学校の半日以上も行ってなかったので一日も無駄に出来ないのだ。

とはいえ、今更学校に行っても遅れたことには変わりはないのでゆっくりすることにした。

「お兄ちゃん、もうご飯できていますよー」

「ああ、今いくよ」

最愛の作る料理はそこらの店より美味しいので期待しながら食卓に向かう。

今日のご飯は鮭の塩焼きに味噌汁、ご飯などオーソドックスな飯だ。

「んじゃ、いただきます」

俺は最愛の朝ご飯を食べゆっくり着替えようとすると、ふと視線に借りてきた漫画があるではないか。

あと一步踏み出せば、確実に踏んでいたに違いない。

俺はその漫画を踏まないように右足を左へと踏み出す、その時バキヤツと何かしらの音が足元から聞こえてきた。

その足を恐る恐る足を上げてみると、ヒビが入っているキャッシュカードがあった。

(俺、絶対当麻の不幸が乗り写ってんだろ……)

「お兄ちゃんどうしたんですか？」

「ヒョコツと顔を出す最愛。その表現もなんとも可愛いらしいのだが俺はそんな余裕もなく、ウルウルした表情で最愛のほうを向く。

「最愛、俺の足元を見てくれ……」

足を上げると先ほどのキャッシュカードがある、最愛は頭に？を浮かべながら足元を見ると五秒の沈黙が流れる。

「……お兄ちゃん絶対、当麻さんの不幸が写ってるでしょ」

「そう思うか」

「待っててください、今から当麻さんに罰を与えてきますから」

「待って待って！罰って窒素パンチだろ、当麻はそんなもん受けたら確実に全身の骨バラバラになっちゃうから!!」

絹旗最愛は空気中の窒素を操る能力者である。その力は極めて強力で圧縮した窒素の塊を制御することで、自動車を持ち上げたり、銃弾を止めることができるのだ。

つまりその力を当麻の右手以外に当たったりしたら、天井しか見れない病院生活を送ることになってしまう。

それはいくらなんでも可哀想すぎるので俺は必死に最愛を止める。

「大丈夫ですよ、痛いのは一瞬ですから」

「そういう問題じゃないよ!頼む、今度なんでもするから!」

最愛は玄関のドアノブを捻ろうとした手がピタツと止まった。

「……お兄ちゃん、それは本当ですね」

「ああ、マジだマジ、なんでもしてやる」

「じゃあ今度、一緒に服を買いに行ってくださいませんか？」

「えっ、それだけでいいの？」

「……はあ、ホントお兄ちゃんは鈍感なんですね」

その鈍感さも当麻さんから引き継いでいるんですか

何を言っている、この俺が鈍感だって？そんなもん天然フラグ建設者の上条君だけだろう。なぜ周りから鈍感男や堕とし神などこの俺

に付けるだろうと思っていた。

「まあいいや、んじゃ今度な」

「はい」

そのあと学校の準備をしているとポケットに入れていた携帯のバイブが鳴り出した。取りあはず携帯を開くと当麻からの着信だった。

「はい？俺だけど」

「き、恭哉、早く学校に来い！」

小萌先生が泣き出して青髪と土御門が暴走してんぞ！…………ぎゃああああ!!なんで俺までー！

ぐちゃ、ごきゃ、バキンツと携帯越しでも分かる悲鳴を残してブツツと切れてしまった。

「や、やべえ早く行かねえとみんながー！」

乱暴に携帯を閉じ、さっきのキャッシュカードのことなど忘れたかの様に玄関のドアを蹴飛ばし消えていった。

「お兄ちゃんってあれ？もう行ったんですか……………」

俺は学校まで全力で走ったが時すでに遅し、青髪と土御門は動物園の檻が放たれたごとくまさに野生の獣になっていた

その横には当麻だったものが倒れており、俺の顔を見るなりいきなり吠え出した。

「はあああああくうううらあああきよよよううううやあああ

!!!!

「は、はあ!?!」

あまりのことで俺は尻餅をついてしまった。

(や、やべえ立てねえ……………)

「キサマ、イイノコシタコトハアルカ」

「い、いえ」

俺は二人の威圧感で思わず答えてしまった。

「ソウカ、ナラバコモエセンセイニムクイテ…………シネ」

「あ、あのですね、まずは話し合いというものを……………」

「モンドウムヨウ」

「い、嫌だ。まだ俺は……ぎゃあああああ!!!??」

その後、俺と青髪、土御門なぜかわからんが当麻も小萌先生から一時間以上怒られたのだった。

「小萌先生、なんで俺まで怒られるんですか!？」

「連帯責任ですよー!」

この時小萌先生を表すとブンブンと幼稚園児が頬を膨らませて怒っているにしか見えないのだ。

まあ、それを見ている青髪と土御門はやたらと喜んでいるような気がする。

「はあ、小萌先生に怒られるなんて感激なんやで」

「ロリでMかよ、どうしようもないな」

「何を言っているキョウヤん、ロリこそ最強何だにやー!」

「はあ、ここには変態しかいないのか……」

「ちよつと待て恭哉、なんで俺が含まれている!!」

「え、だってこの間こいつらと当麻の家に行ったときベットから出てきたものは何だ?」

「なんでお前ら俺の家に勝手に入ってんだよおおおおお!!!」

「俺の施錠に解けないものはない」

「別にカツコよくないからな!？」

「カミヤんいい趣味してるぜ、家庭教師さんと一緒!だっけ?」

「なに人の家忍び込んでエロ本探索してんだ!!」

「えっ、お約束だろ?」

「こらー、上条ちゃんたち人の話をきくのです!」

「まだまだあつたぜ、家庭教師との関係!特典DVD付き、とかな」

「不幸だああああ!!!」

これがデルタスクエア(四人の馬鹿の)の関係だ。